双葉地区
未来創造型リーダー育成構想

2017 年（平成 29 年）3 月策定

双葉地区教育構想推進会議

目　次

Ⅰ　これまでの双葉地区教育構想の総括　(ページ)

（1）双葉地区教育構想の黎明（2004（H16）～2005(H17)）　1
（2）双葉地区教育構想の「草創期」（第1フェーズ，2006（H18）～2010(H22)）の総括　2
（3）震災後の不屈の「挑戦期」（第2フェーズ，2011(H23)～2016(H28)）の総括　9

Ⅱ　新構想のグランドデザイン

（1）教育構想を改定する理由と重視すべき観点　17
（2）新構想の骨組み　17
（3）新構想で重視する3つの視点　18
（4）「福島県双葉郡教育復興ビジョン」との関係　20

Ⅲ　新構想のアクションプラン

1．ふたば発、世界に向けた変革者の育成

（1）変革者育成のための「探究」　22
（2）双葉発グローバル人材の育成　24
（3）スペシャリストの育成　25
（4）中高一貫教育に向けて　26
（5）変革者育成のための指導体制・教育環境の整備　27

2．新時代のトップアスリートの育成

（1）双葉地区におけるサッカーの新たなチャレンジ　30
（2）ビクトリープログラムの今後　33
（3）新たな競技種目　34

3．多様な主体との連携・絆づくり

（1）双葉郡教育復興ビジョン推進協議会　36
（2）ふたばの教育復興応援団　37
（3）双葉地区地域学校協働本部　37
（4）JFAとの連携　37
（5）サポートファミリー制度の再開　37
（6）JICA との連携　38
（7）大学との連携　38
（8）NPOとの連携　38
（9）姉妹校等との国際交流　39

双葉地区教育構想のこれまでの実績、成果等（データ集）　別冊

Ⅰ　これまでの双葉地区教育構想の総括

（１）　双葉地区教育構想の黎明（2004（H16）～2005(H17)）

○ 2004 年（平成 16 年)、財団法人日本サッカー協会（ＪＦＡ）から福島県に対して、公立学校と連携して、「サッカーのみならず、コミュニケーションスキル、外国語等総合的な教育を行い、日本サッカーのレベルアップと社会をリードしていく世界に通用する人材の育成」を目的とする人材育成プログラムの提案があった。

○ これを契機として富岡町、楢葉町、広野町の各教育委員会と各町立中学校、県立富岡高校、福島県及び福島県教育委員会関係者を構成員とする「双葉地区教育構想検討協議会」を設置し、日本サッカー協会、福島県サッカー協会の参画も得て本構想の検討を進め、2005 年（平成 17 年）３月には「双葉地区教育構想基本方針最終まとめ」としてとりまとめられた。同年４月には「双葉地区教育構想推進会議」を設置し、現在に至るまで本基本方針に基づき、他に類を見ない壮大な構想の実現に向けて推進を図ってきた。

○ 双葉地区教育構想（以下「本構想」という。）は、「真の国際人として社会をリードする人材の育成」を基本目標に据え、これを実現するために、①基礎・基本を定着させ、学ぶ意欲、論理的な思考力や判断力を身に付けた「確かな学力」を育むこと、②高い志を持ち、豊かな人間性・社会性を備えるなど「個」を磨くこと、③豊かな国際感覚を身に付けた地球時代の「開拓者」を育てることを３つの柱として掲げた。

○ 構想の実現に向けて、指導実績のある教員、複数の外国人講師及び専任のスポーツ指導者を配置し指導体制を充実させるとともに、新学科棟や新体育館などトップアスリート育成にふさわしい施設整備も行った。

○ また国際人の育成を図るために、ＪＦＡや大学等と連携して、中高６年間を見通した中高一貫教育を行うこととした。対象はＪＦＡによって選抜された生徒だけでなく、様々な分野で世界に通用する人材を育成するために、富岡高校と連携中学校４校（富岡第一中学校、富岡第二中学校、楢葉中学校、広野中学校）との間で、教育課程や教員・生徒間の交流等の連携を深める、６年間を通した連携型の中高一貫教育を行うこととした。

○ 基幹校である富岡高校は、普通科から国際・スポーツ科に学科転換し、学区を県内一円とし、定員を 80 名から 120 名へ増員し、国際コミュニケーションコース、福祉・健康コース、国際スポーツコースの３コースを設定して、効果的なカリキュラム編成を行うとともに、生徒の海外留学制度を設けるなどして、外部団体との連携により、2006 年度（平成 18 年度）にスタートした。

（2）双葉地区教育構想の「草創期」（第1フェーズ, 2006（H18）～2010(H22)）の総括

（全体状況）

○ 本構想は開始から５年のうちに、富岡高校・富岡第一中学校バドミントン部の全国大会優勝、富岡高校におけるサッカーやゴルフのプロ選手の誕生、４年生大学進学者の大幅な増加、あるいは介護福祉士等の資格取得者の増加など、着実に成果を上げていった。

○ 構想の開始時には、公立学校としては比類なき取組に対して、県民は大きな期待とともに、その実現に不安も抱いていた。しかしながら、生徒がスポーツや進学の面で実績を残していく中で、また県民からの指摘を真摯に受け止め説明を尽くす中で、なにより生徒自身の真摯な態度により、草創期の５年間で本構想への県民の理解は深まっていったものと評価できる。

次に、富岡高校の３つのコース（国際コミュニケーション、福祉・健康、国際スポーツ）及び本構想に基づくそれぞれの取組ごとに総括を行う。

ア 国際コミュニケーションコース

○ 将来国際社会で活躍する人材を目指して、実践的外国語教育を中心とし、我が国や諸外国の歴史・文化について正しく理解し、自分の意見や考えを適切に表現できるコミュニケーション力の育成を目標とした。具体的には、英語検定等の資格の取得や国公立大学等への進学を目指して、多くの語学専門科目、国際ボランティア等の学外単位認定、複数の外国語指導助手（ＡＬＴ）の配置、国際協力機構（ＪＩＣＡ）職員による講座、姉妹校等への留学、コミュニケーション部におけるネイティブによる指導などの取組を推進してきた。

国際コミュニケーションコース授業

○ フランスのルイ・バスカン高校と 2006 年（平成 18 年） ９月に姉妹校協定を締結し、冬期間の 3 週間程度、生徒を毎年 6 名ずつ派遣した。国際コミュニケーションコースや福祉・健康コースの生徒は、ホームステイにより受入家族だけでなく地域の方々とも触れ合うとともに、ルイ・バスカン高校においては、英語の授業等を受講したりジャパンフェスタを開催し日本文化を紹介したりして交流を深めた。国際スポーツコースの生徒はＣＴＮＦＳ（サッカーナショナルトレーニングセンター）に宿泊しながら、現地高校生と共にルイ・バスカン高校の授業を受けた後、ＩＮＦ（フランスナショナルフットボール学院）においてサッカーを通した同年選手との交流を行った。

フランスサッカー交流

○ また、2007 年（平成 19 年）からは、オーストラリアやニュージーランドにおいて約１年間の長期留学を開始した。毎年度１名の生徒を派遣することとし、留学した生徒はホストファミリーに支えられ、自己理解、異文化理解を深め、英語力を高めた。また、精神的にも成長し、留学体験を深めてそれぞれの進路に活かした。前年に留学体験した先輩のアドバイスを受け、ＮＰＯ法人日本国際交流振興会（ＪＦＩＥ）による高校生交換留学プログラム選考試験に一回で合格する生徒が出るなど顕著な成果が表れた。

○ 卒業時にはほとんどの生徒が英語検定準２級以上を取得し、入学時からの語学力の伸びには顕著なものがあった。英語スキット（寸劇）コンテストや英語弁論大会で入賞する生徒も生んだ。ただし、本構想では目指す姿のひとつとして「バイリンガル人材」とされているが、この高い目標に照らせば発展途上であった。

○ 進学先としては英文・国際系の進学が多く、専門性を活かした進路となっているが、国公立大学進学者は少なく学力の底上げが課題であった。また、目標とする生徒数の確保に課題があり、志願者数を増加させるための広報やカリキュラムの改善等を推進していた。

イ 福祉・健康コース

福祉実習

○ 地域の人々の心身の健康的な生活をサポート・コーディネートできるスペシャリストを目指し、教育系・看護系・福祉系等の大学進学や、健康福祉関連産業等への就職を目標とした。心身の健康に関する基本的な学習をもとに、高大連携による福祉・健康に関する専門的学習、介護福祉士等の資格取得を目指すなどの取組を行ってきた。

○ 介護コースの生徒は８割程度が在学中に介護福祉士の資格を取得し、コースの専門性を活かした進路を実現していった。介護福祉士の全国の合格率は約５割のところ、富岡高校の合格率は７割以上をマークしていた。

○ 福祉・健康についての専門性を求める生徒たちは、自己の目標達成に向け努力を重ね

たが、他方、連携中学校からの消極的な理由による入学者等にとっては、必ずしも自らが望む教育内容ではない場合もあり、学習意欲が高まらず成績が伸びない生徒も見受けられた。本構想の中では、「福祉政策等を国際的な視野で考えることができる」という目標が掲げられていたが、この高い目標を前にして、このような現実的な課題もあり、保護者や地域からは普通科や総合学科への改編の要望もあった。

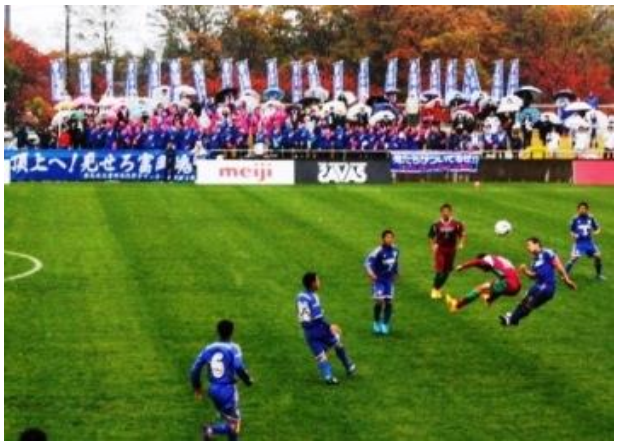
ウ 国際スポーツコース

○ 世界に通用する専門的な技能のみならず、真の国際人としての人間性や教養、コミュニケーション能力を身に付けた、サッカー、バドミントン、ゴルフのスペシャリストとして、プロスポーツ選手やリーダーを育成することを目標とした。各競技団体との連携及び専任コーチによるトレーニング指導、国内外の高校とのスポーツ交流や遠征試合、中高６年間にわたる授業トレーニング、福島大学教授による講義や演習を年間複数回行うなどの取組を実施してきた。

専任コーチによるゴルフの技術指導

ゴルフ練習場でのトレーニング

バドミントン（中学校）横断幕



県版サッカー試合（男子）

○ 本構想開始以来、JFAアカデミー福島や各運動部で輝かしい成果が見られ、全国大会や国際大会で優勝するなど大きな活躍を見せた。卒業後もスポーツ分野において、プロを含む国内外で活躍する人材を多数輩出するなどの実績を残した。特にバドミントンにおいては目覚ましい戦績を上げ、ビクトリープログラムや一流の指導者、授業トレーニング、メンタル面のスキルアップなど、全国でも類を見ない取組が実を結んだと考えられる。大学進学においても、難関大学や国立大学への進学者、スポーツ関連産業への就職者などを多数生む結果となった。

○ 一方で､本構想に掲げる国際的なトップアスリートの育成という高い目標に照らせば、バドミントン競技で世界ジュニアバドミントン選手権大会に出場を果たすなど礎を築いてきたが、全体的に見ると、さらなる高みを目指す途上であったと評価できる。生徒たちは規律正しく、地域からも好評を得ていたが、謙虚かつ積極的で信頼される国際水準のリーダーとして身に付けるべきマインドに、より一層磨きをかけることを目指していた。

バドミントン練習

バドミントン試合

（JFA アカデミー福島とＪヴィレッジの総括）

○ ＪＦＡは、全寮制の中高一貫指導により世界に通用するサッカー選手を育成する人材育成プログラムとして、2006 年（平成 18 年）に JFA アカデミー福島を開校させた。

「世界基準」をキーワードに、チーム強化ではなく、あくまで個の育成を目的としており、サッカー技術の向上に加え人間的な面の教育も重視し、社会をリードする真の世界基準の人材を育成することを目的として、初年度、男子 17 名（中学１年生）、女子 23 名（中学１年生～高校１年生）が入校し、2010 年度（平成 22 年度）までに 15 名の卒校生が大学や「なでしこリーグ」に進むなどの成果を上げた。

2009 年（平成 21 年）以降、全国には、他にもロジング形式（寄宿・週末通い型）のアカデミーが開設されているが、その中でも JFA アカデミー福島は、唯一の中高６年間一貫指導を行うＪＦＡ直轄の軸となるアカデミーに位置付けられ、その充実・強化に向け取り組まれてきた。

○ また、サッカーを通じて独創的な発想と果敢に挑戦する勇気と行動力で世界を舞台に活躍し、国際人としてリードする人材育成を行う基盤整備を支援するため、県は、2005年度（平成17年度）から2009年度（平成21年度）に「サッカーによる国際人育成支援事業」を実施し、関係町が行うＪＦＡ寄宿舎及び練習グラウンドの整備・改修等に対して補助を実施してきた。

（ビクトリープログラムの総括）

○ ビクトリープログラムは、バドミントン及びゴルフ競技について、中学校・高校６年間の一貫した指導プログラムとして専任のスペシャルコーチによるハイレベルの充実した技術指導、トレーニング等を行うとともに、学業やスポーツに専念できる生活環境（寮）を整え、世界に通用する専門的な技能を身に付けた社会をリードする国際人の育成を目指す、先駆的な人材育成プログラムであった。富岡町教育委員会と県教育庁スポーツグループ（当時）が主導し、県、学校、県体育協会と連携を図りながら、トップアスリートとしての競技力だけではなく、人間性や教養、コミュニケーション能力を身に付けた社会のリーダーを育成することを目指して進めてきた。その中で、目的達成に向けて最重要事項であった才能ある選手の選考については、「双葉地区教育構想ビクトリープログラム審査実行委員会」を設置し、２次にわたる審査会での厳正な審査を実施してきた。

○ 開始当初から、各顧問をはじめ関係者等が広報に努めた結果、全国的に認知を得ることができ、全国各地から才能、意欲を有する選手からの出願が確保できた。その結果、中学校、高校とも、幾度もの全国一や国際大会での活躍など大きな成果を得ることができた。なお、各中央競技団体と協力体制を確立できたことが、短期間で成果を得られた要因の一つであったといえる。

（県版サッカーの総括）

○ 本構想における人材育成の基本は中高６年間の一貫教育であるが、例外的に富岡高校サッカー部を対象とし、高校段階のみでの取組も実施した。ＪＦＡ主体の育成プログラムであるJFAアカデミー福島に対し、こちらは県立高校での取組であることから「県版サッカー」と呼ばれた。

○ Ｊヴィレッジの活発な利活用や女子サッカー部「マリーゼ」の誕生など、県内でのサッカー振興機運の高まりを背景として、県サッカー協会は2005年（平成17年）６月、「『サッカー王国ふくしま』チャレンジ宣言」を行い、その中で、レベルアップの牽引役として富岡高校を強化の拠点と位置付け、全国のトップチームにすることを目標として掲げた。これと連動する形で県版サッカーもスタートした。

○ 県サッカー協会は、初年度から素質のある生徒が志願するよう、指導者等のサッカー

関係者や技術レベルが高い中学生に対し、本構想の広報や富岡高校サッカー部の紹介等を精力的に行うとともに、毎年度強化費補助金を交付したほか、2013 年度（平成 25 年度）全国高等学校サッカー選手権大会への出場に際しては、激励金も交付するなど支援を行った。また、ＪＦＡも JFA アカデミー福島のコーチを派遣して技術指導を行うなど、手厚く支援した。

○ このような支援や、人工芝の専用グラウンドなどの恵まれた練習環境により、構想開始３年目となる 2008 年度（平成 20 年度）には男子が全国高等学校サッカー選手権大会福島県大会で優勝し、全国大会出場を果たすなど、県内トップレベルの実力を有することとなった。

（中高連携の状況と総括）

○ 富岡高校ＡＬＴ２名及び教員１名が、連携４中学校をそれぞれ週一回程度訪問し、中学３年生に対して英語の授業を行った。高校で行われる先進的な英語教育への架け橋となる授業内容であり、少人数による双方向の指導が行われた。これにより中学校生徒の英語への興味・関心が高まり、英検合格者が増加するなどの成果が見られた。また、中学生の英語に対する苦手意識を払しょくし、富岡高校の国際コミュニケーションコースへの理解が深まることにつながった。

○ 連携中学校において、富岡高校による福祉の出張授業が年間複数回行われた。富岡高校の実習棟を使用した福祉体験などにより、福祉に対する興味・関心が高まると同時に、福祉・健康コースへの理解の深まりにつながった。

○ Ｊヴィレッジにおいて、富岡高校サッカー部を指導している上級指導者による連携中学校の生徒へのサッカー指導が行われ、地域のジュニアサッカーのレベル向上につながった。また、バドミントンでは富岡高校と富岡第一中学校が合同練習を行うことにより、中高生相互の連帯意識の醸成や、中学生の競技力の向上と目的意識の高揚が図られた。

（連携入試の総括）

○ 2006 年度（平成 18 年度）から、本構想の推進のため、富岡高校の入学者選抜において、県外からの出願者に対する弾力的な取扱いを行った。2006 年度（平成 18 年度）の高校１期生の募集についてはⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期選抜で募集したが、2007 年度（平成 19 年度）からの入学者選抜においては定員の充足について特別な取扱いを行い、Ⅰ期選抜の合格内定者により、募集定員を充足することができることとした。連携型入学者選抜については、本構想初年度の中学１期生が高校に進学する 2009 年度（平成 21 年度）から実施した。定員の充足についての特別な取扱いとして、Ⅰ期選抜及び連携型選抜の合格内定者により募集定員を充足することができることとした。

（サポートファミリー制度の総括）

○ 全国各地から集まった中・高校生の里親として応援するため、広野町、楢葉町、富岡町にサポートファミリー制度が創設された。中学生、高校生という多感な時期に、親元を離れて生活する子どもたちの様々な不安を解消し、楽しく生活できるように、趣旨に賛同したファミリーが温かく子どもたちを迎え入れた。

○ ゴールデンウィークや長期休業の期間に双葉地区に残る子どもたちがサポートファミリーと寝食を共にしたり、遊んだり、家の手伝いをしたりすることにより、小学校卒業時から親元を離れている子どもたちは、家庭の温かさや人と人とのふれあいの大切さなどを実感していた。町職員と一緒に町内のゴミ拾いに参加するなどの奉仕活動や、田植えや稲刈りなどの体験活動も行われ、貴重な時間を過ごすこととなった。Ｊヴィレッジでのクリスマスパーティーに招待されたサポートファミリーもまた、アカデミー生の感謝の気持ちを受け止め、両者の絆が深まっていった。

○ サポートファミリーの発案により、サッカー場に掲げる横断幕をアカデミー生と一緒に作成したケースもあった。互いの思いが書き込まれた横断幕は、試合に臨む選手たちの心を鼓舞するとともに、試合の中で苦境に立たされた時の励ましにもなり、何より、サポートファミリーとアカデミー生の強い絆を象徴するものとなった。

○ このように、地域とアカデミー生の双方向の交流は、人材育成プログラムという視点からも大きな成果を得ることができた。

（桜風寮の設置、運営の総括）

○ 2006 年（平成 18 年）４月、本構想により、親元を離れ富岡高等学校及び連携する中学校に自宅から通学することが困難な生徒のために、富岡町が「富岡町教育支援センター桜風寮（おうふうりょう）」を整備した。富岡町が民間企業の社員寮を譲り受けた施設で、福島県体育協会が富岡町の指定管理者として寮の管理運営業務を受託し、運営に当たった。

2008 年（平成 20 年）３月には、富岡町が女子生徒のための「富岡町教育支援センター第二桜風寮」を整備した。

○ 桜風寮は、本構想の国際スポーツコース設置に当たり、県内外の自宅から通学が困難な生徒に必要不可欠となる生活環境を提供する施設として、本構想の基盤を支える重要な役割を果たした。寮には管理人を常駐させ、生徒が楽しくかつ安全に学業やスポーツに専念できる快適な生活環境を提供したほか、寮生活を通して規則正しい生活習慣や日常生活のマナーを習得させるとともに、毎日の食事の中で、アスリートとしての栄養のバランスや健康管理の大切さを指導した。このように桜風寮は、単に生活の場というだけではなく、人間教育の面においても重要な役割を担っていたといえる。

桜風寮（男子）

第二桜風寮（女子）

本構想がスタートして５年が経過し、双葉地区教育構想推進会議の場などでも節目としての総括を進めるべく議論がなされ、上述のような成果や課題も徐々に明らかになってきた折に、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生した。

（３） 震災後の不屈の「挑戦期」（第２フェーズ，2011(H23)～2016(H28)）の総括

（原発事故による避難先での活動再開）

○ 2011 年（平成 23 年）年３月、東日本大震災とそれに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故が起き、避難指示区域に立地していた富岡高校は福島市、矢吹町、猪苗代町、いわき市及び静岡県三島市において、５つのサテライト校により学校運営を行うこととした。震災後の緊急避難時を経て、他校のサテライトは１か所に集約されていったが、富岡高校は休校に至るまで分散したままであった。これは震災及び原発事故後にあっても、本構想を実現するために、練習条件や教育環境を確保し、最大限の成果を上げるための苦渋の選択であった。

・ JFA アカデミー福島は、静岡県御殿場市の時之栖（ときのすみか）スポーツセンターに一時移転し、中学生は御殿場市立富士岡中学校に、高校生は富岡高校生（平成 27 年度以降の入学生はふたば未来学園高校生）として静岡県立三島長陵高校サテライト校に通学することとなった。

・ 高校段階だけで行う県版サッカー及びゴルフは、近郊にサッカー場やゴルフコースがある福島市を活動拠点とし、福島北高校内にサテライト校を設け再開した。

・ バドミントンは、町営の充実した体育館がある猪苗代町を活動拠点とし、猪苗代高校内にサテライト校を設け再開した。なお、中学生は、富岡町立富岡第一中学校に入学し、区域外就学として猪苗代町立猪苗代中学校へ通学することとした。

・ 国際スポーツコース以外は磐城桜が丘高校及び光南高校内にサテライト校を設け再

開し、後にいわき明星大学内のサテライト校に集約した。

（国際スポーツコース緊急寮の設置、運営）

○ 前述のとおり富岡高校がサテライト校として活動を続けるに当たり、国際スポーツコースの生徒については、避難先での生活の拠点となる寮の設置と練習環境の整備が必須条件であったことから、福島市に県版サッカー及びゴルフの生徒を、猪苗代町にはバドミントンの生徒を対象とした寮をそれぞれ緊急に設置した。なお、猪苗代町の緊急寮については、受入可能生徒数の関係等により、2014 年度（平成 26 年度）から２施設にして男女別々とした。

○ 避難による練習環境の悪化に伴う競技力の低下を抑止するため、練習施設の確保や用具の整備、練習場までの送迎及び遠征のためのバスの確保などに努めてきた。

○ このように、１つの学校が複数のサテライト校として分散して教育活動を行う環境は全国でも例がないものだったが、関係者の献身的な協力もあり、双葉地区教育構想の旗を降ろすことなく、それぞれの活動場所で懸命な教育活動が行われ、2014 年度（平成 26 年度）インターハイバドミントン団体での史上初となる男女同時優勝など輝かしい実績を残した。

（震災後の JFA アカデミー福島の状況）

○ 震災後、JFA アカデミー福島の総勢 125 名の中学生・高校生は、J ヴィレッジが使用できなくなったことに伴い、これに近い活動拠点を検討した結果、2011 年（平成 23 年）4 月から、天然芝及び人工芝のサッカーグラウンドのほか、トレーニングルームなども備えた時之栖スポーツセンター（静岡県御殿場市）に一時移転し、共同生活を通じてコミュニケーション能力を高めるとともに、学力や競技力の向上を目指して日々学習や練習に取り組んできた。

○ また、静岡県立三島長陵高校サテライト校の設置に当たっては、本県教育委員会と静岡県教育委員会との間で学校間連携に関する協定を締結し、静岡県教育委員会及び三島長陵高校からの全面的な支援、協力によりサテライト校を運営してきた。学校間連携により単位互換が認められ、科目履修について１学年当たり最大 18 単位を三島長陵高校が担当し、成績管理や生徒指導は三島長陵高校の内規に基づいて行うこととした。

時乃栖グラウンドでの練習

○ 女子については、2015 年（平成 27 年）8 月から、人工芝のサッカーグラウンドを備えた裾野市の「帝人アカデミー富士」に拠点を移し、練習環境、生活環境とも改善が図られた。

なお、中学生女子は、2016 年度（平成 28 年度）から裾野市立富岡中学校に通学することとなった。

帝人アカデミー富士での練習

○ 静岡でのこのような環境の下、双葉地区での再開を前提としつつ、日本サッカー協会直轄の軸となるアカデミーとして、これまでどおり「世界基準」をキーワードにサッカーを通じた真の国際人の育成を進めてきた。2015 年度（平成 27 年度）までの卒校生は通算で 109 名（男子 64 名、女子 45 名）に及び、これまで在校生・卒校生の年代別代表チームへの選抜や、卒校生のプロサッカーチームへの入団などの成果を得ている。

また、戦績をみても、男子 U18 トップが 2013 年度（平成 25 年度）から 2015 年度（平成 27 年度）まで最高峰リーグであるプレミアリーグに参戦、男子 U15 が 2015 年度（平成 27 年度）高円宮杯全日本ユース(U-15)サッカー選手権大会で全国ベスト４、女子 U15 が 2016 年度（平成 28 年度）全日本女子ユース(U-15)サッカー選手権大会で全国優勝を飾るなど、輝かしい結果となっている。

○ なお、静岡県への移転により本県（広野町・楢葉町）との物理的な距離が生じ、また、一時移転が長期化したことで、本県に対する意識が希薄になることが懸念されたため、JFA アカデミー福島が県内で再開するまでの間、本県との絆をつなぐための事業として、県が 2014 年度（平成 26 年度）から JFA アカデミー福島との交流事業「サッカーを通じたふるさと再生事業」を実施している。同事業では、これまで、広野町、楢葉町、いわき市を会場として、JFA アカデミー福島の選手やコーチ等による県内小中学生等を対象とした「ふれあいサッカー教室」を実施してきた。

○ しかし、2016 年度（平成 28 年度）からは在校生全員が静岡県への一時移転後に入校していることや、練習及び寮生活はもちろん、学校生活においても JFA アカデミー福島の生徒だけで過ごす時間が長く、広野町の本校舎の生徒などと交流する時間が少ないことから、これまで以上に本県とのつながりを強めていくことが必要である。

（震災後の県版サッカーの状況）

○ 県版サッカーは、３面（人工芝２面、土１面）のサッカーグラウンドを備えている福島市十六沼運動公園サッカー場を練習の拠点として強化に取り組んできた。学校から練習場所まで距離があることからバスにより送迎を行うなど、震災前の練習環境に近

づけるよう取り組んできた。その結果、2013 年度（平成 25 年度）には 2008 年度（平成 20 年度）に続き二度目となる全日本高等学校サッカー選手権大会福島県大会で優勝を果たし、全国大会へ出場した。

（震災後のゴルフの状況）

○ ゴルフは、福島市内の練習場と福島市郊外のゴルフ場を練習拠点とし、日本女子プロゴルフ協会（ＬＰＧＡ）派遣の専任コーチを震災前から引き続き配置して強化に取り組んできた。なお、中学校や寮の受入環境及び練習環境の変化等を勘案し、ビクトリープログラムとしての中学段階での育成は休止することとし、2011 年度（平成 23 年度）からビクトリープログラム生の募集を停止した。

（震災後のバドミントンの状況）

○ バドミントンは、猪苗代町の全面的な協力のもと、猪苗代町総合体育館「カメリーナ」を練習拠点とした。学校の長期休業期間等において、体育館の使用権を確保できない時があるなどの課題があったが、近隣市町村の施設を利用する等、できる限り良好な練習環境の確保に努めた。また、震災前から引き続き外国人の専任コーチを配置し、ハイレベルな指導を継続した。逆境をバネに厳しい練習を重ねた結果、中学校、高校とも全国大会での幾多の優勝を飾るなど、「バドミントンに富岡、猪苗代あり」と全国にその名を轟かせた。

○ 震災後は学校の保護者会、後援会の組織力低下等によって、練習や大会出場に要する経費の確保が困難な状況となったが、富岡町からの激励金等による支援のほか、中学校の中体連等に対しては猪苗代町からの支援により、活動を継続することができた。

なお、2019 年度（平成 31 年度）以降は広野町のふたば未来学園高校及び併設中学校での活動となることから、両町に代わる新たな財政支援の体制づくりを進める必要がある。

○ バドミントンの中学生を富岡第一中学校に受け入れていた富岡町は、町の行政機能の維持にも苦慮する状況であったが、構想を継続する重要性を強く認識し、関係機関との連携によりビクトリー生の募集を続け、町が一丸となって震災前同様の支援も行った。その結果として前述のとおり輝かしい成果を収め、県内外に避難している町民に元気と勇気、そして感動を与えることができ、帰還を目指す中での町民の絆をつなぐ大きな活力となった。

○ また、富岡第一・第二中学校の三春校の生徒と、猪苗代町で活動するビクトリー生との交流の場としてスポーツ交流会等が開催され、連帯感の醸成が図られており、三春校の校舎内に掲示されるビクトリー生の活躍の様子は、避難中の生徒の大きな励みとなっている。

○ 一方、震災後の活動拠点となった猪苗代町からの視点でみると、猪苗代中学校バドミントン部の全国中学校体育大会での優勝をはじめとした活躍は、「猪苗代」の名を全国に発信し、町のＰＲにつながった。

また、猪苗代中学校の生徒たちは、目標に向かって日々努力を重ねるビクトリー生と一緒に学校生活を送り、全国トップレベルの実技を身近で観ることができる環境にあることが刺激となり、学習、スポーツ面に好影響がもたらされた。なお、ビクトリー生の日頃の活動態度や勤勉な姿勢は、中学校の保護者や町民からも好意的に受け止められた。

（震災後の連携中学校の状況）

○ 震災及び原発事故からおよそ６年が経過した今もなお、双葉郡では６校の小中学校が休校を余儀なくされており、再開した学校においても、仮設校舎や他施設を間借りした校舎で、古里から離れた場所において教育活動を行っている学校もある。

○ビクトリープログラムの中学校部分を担ってきた富岡第一中学校・富岡第二中学校は三春町に、JFA アカデミー福島の生徒を受け入れてきた広野中学校と楢葉中学校はいわき市に移転せざるを得なくなったことから、原発事故以降、構想が目指していた体系的な中高一貫教育や地域と連携した人材育成に困難が生じることがあった。

○ 例えば散り散りになってしまったがゆえに、第１フェーズ「草創期」で行われていた、富岡高校との連携による英語や福祉の授業などは実施困難になった。しかしながら、震災前から実施してきた富岡高校のＡＬＴの中学校への派遣については、震災後も楢葉中学校と広野中学校を対象に継続し、2015 年度（平成 27 年度）からはふたば未来学園高校に引き継がれている。

（震災後の連携入試の総括）

○ 連携型入学者選抜について、東日本大震災によるサテライト校での教育活動等であることなどの理由で、2012 年度（平成 24 年度）から募集定員を減らした。2014 年度（平成 26 年度）からは、猪苗代中学校と富士岡中学校で受け入れられている双葉地区教育構想に係る生徒も連携型選抜に出願可能とした。そして、2015 年度（平成 27 年度）はふたば未来学園高校の開校に伴い、富岡高校の募集を停止した。

○ 2011 年度（平成 23 年度）を境に、連携する中学校に在籍する生徒は大きく減少したが、連携型入学者選抜においては定員の８割程度の志願者数を維持できており、双葉地区教育構想に基づいた富岡高校の教育活動は一定の評価を得ていたと判断できる。

（富岡高校の生徒数の減少、募集停止、休校）

○ 県内外各地に設けられたサテライト校の教育環境の整備に最大限努めてきたが、避難指示の解除時期が不透明な中、元の校舎での授業再開の目処が立たず、生徒数が減少していった。国際スポーツコースの生徒数は概ね維持されたが、国際コミュニケーションコースと福祉・健康コースの生徒数は激減した。国際コミュニケーションコースの 2010 年度（平成 22 年度）の入学者は 9 名であったが、2013 年度（平成 25 年度）には 0 名となった。福祉・健康コースも、介護コースの生徒は８割程度が在学中に介護福祉士の資格を取得し、コースの専門性を活かした進路を実現していったが、法改正により 2012 年度（平成 24 年度）入学生からは介護福祉士国家試験の受験資格が取得できないこととなった。2010 年度（平成 22 年度）54 名であった入学者数も、2014 年度（平成 26 年度）には 0 名となり、2015 年度（平成 27 年度）をもって両コースが教育活動を行っていたいわき明星大サテライトが閉校となった。

○ このような困難な状況の中で、2015 年度（平成 27 年度）から富岡高校は生徒募集を停止し、2016 年度（平成 28 年度）末をもって休校することとなった。震災前に双葉郡に所在していた富岡高校以外の４校（双葉高校、双葉翔陽高校、浪江高校、浪江高校津島校）も同様に 2015 年度（平成 27 年度）から生徒募集を停止し、2016 年度（平成 28 年度）をもって休校することとなった。

○ 2017 年（平成 29 年）３月１日、快晴の中、富岡高校の卒業式・休校式が行われ、休校前の最後の卒業生となる 62 名の生徒が羽ばたいていった。

これにより、双葉地区教育構想に基づき学科を改編し、構想推進の中核として歩んできた富岡高等学校の 11 年間の歴史はいったん幕を下ろした。

○ 富岡高校を含む双葉郡の５校（双葉、浪江、浪江津島、富岡、双葉翔陽）の将来の再開については、住民の帰還や小中学校の再開など復興の進捗状況を踏まえることが必要であり、条件が整った際の再開を目指す。再開の折には、本構想の担い手として新たな歴史を刻み始めることを願ってやまない。

（ふたば未来学園の設立へ）

○ サテライト校では高等学校としてふさわしい生徒数の規模を維持できず、教育活動に支障をきたしていった。また震災及び原発事故により双葉郡の多くの住民が避難を余儀なくされ、ふるさとのコミュニティの維持をはじめとした多くの課題が発生した。

○ 双葉郡８町村の教育長は、これらの課題を乗り越え、双葉郡の復興再生を果たすために「双葉郡教育復興に関する協議会」において議論を重ね、2013 年（平成 25 年）７月に「福島県双葉郡教育復興ビジョン」（以下「ビジョン」という。）をまとめた。この中で、双葉郡に６年間を有効に活用できる中高一貫校の設立が提案された。

○ 県教育委員会では、こうした認識を共有し、復興を目指す双葉郡に魅力的で充実した教育活動を行う新たな中高一貫校を設置する方針を固め、双葉郡８町村教育長及び中学校長、双葉郡内の県立高校長、中学校・高校のＰＴＡ会長、大学教授、文部科学省、県教育委員会などの関係者を構成員とする「中高一貫校に関する検討協議会」を設置し、その在り方について検討を重ねた。

○ 2015 年（平成 27 年）４月、中高一貫校の早期開校を実現するべく、既存の広野中学校校舎を仮校舎とした本校舎と、猪苗代校舎・三島長陵校舎とを併せて、双葉郡の町村立中学校との連携型中高一貫教育校としてふたば未来学園高校が開校した。

○ ふたば未来学園高校の学科は総合学科とし、当面休校となる富岡高校やその他の双葉郡の高校の伝統や特色、学科内容等を受け継ぎ、普通科目及び専門教育の科目について幅広く学ぶことができるものとした。したがって、富岡高校が担っていた構想対象校としての役割も引き継いでいる。

○ 2018 年度（平成 30 年度）末までには広野町に本設校舎が完成し、2019 年度（平成 31 年度）に併設中学校を開校させて、併設型中高一貫校とする予定となっている。これを見据えて、県教育委員会では「ふたば未来学園中高一貫教育検討協議会」を設置し、2017 年度（平成 29 年度）までに、併設中学校における教育課程等について検討することとしている。なお、併設型中高一貫教育の導入後も、双葉郡の各中学校との連携型中高一貫教育についても継続して実施する。

○ ふたば未来学園高校は、2016 年度（平成 28 年度）は１、２年生のみの在籍であったが、既に様々な取組によって活気に満ち溢れ、その先進的な教育プログラムは全国的に注目されている。このことについては、新構想との関係性を整理した上で「Ⅲ 新構想のアクションプラン」において詳述することとする。

（第２フェーズ「挑戦期」の総括）

○ 震災後の不屈の「挑戦期」を総括すると、サテライト校等への緊急避難により中高連携に必ずしも十分ではない教育環境の中で、様々な不都合が生じつつも、関係者が避難先で持てる力を最大限に発揮して、本構想の維持に尽力した。

○ 震災による甚大な影響を嘆くだけでなく、未来に向けて双葉郡の教育復興を果たすために、関係者間で議論を重ね、ふたば未来学園の設立と富岡高校の休校という決断に至った。したがって、今後は双葉地区教育構想の中核であった富岡高校を含む５校の精神をふたば未来学園に引き継ぐとともに、新構想の中核として本学園を位置付け、さらに飛躍させていく方向で推進する必要がある。

○ サテライトという環境でも生徒が力を発揮でき、着実に成果を残せたのは、静岡県、福島市、いわき市、猪苗代町、いわき明星大学、各緊急寮のオーナーやスタッフその他の関係者・関係団体等による献身的な協力と支援のおかげである。これらの方々の支えなくして「挑戦期」の教育活動はありえなかった。この場を借りて、心からの謝意を表明する。

（第３フェーズ「飛躍期」を描く新構想へ）

○ 震災からおよそ６年が経過し、富岡高校サテライトの生徒にも、本来の「双葉地区」を知らない生徒が大勢を占めるようになった。第３フェーズ「飛躍期」において育成する子どもたちの多くが、こうした状況であることも含めて、新構想を描いていくことが必要である。

○ 教育構想の推進母体である双葉地区教育構想推進会議や各部会は、震災後３年間開催が途絶え、それぞれの持ち場で関係者が奮闘する状態が続いた。2014 年度（平成 26 年度）から推進会議を再開させたところ、本構想を取り巻く環境の変化を受け、構想を大きく見直す必要があるという共通認識が確認できた。

　そこで、県関係課長、３町教育長、富岡高校長及び 2015 年度（平成 27 年度）から推進会議構成員となったふたば未来学園高校長による「双葉地区教育構想の今後の在り方検討会」において、今後の構想の在り方を検討することとなった。2015 年度（平成 27 年度）に検討会を３回開催し、「双葉地区教育構想見直し方針（案）」を作成し、2015 年度（平成 27 年度）第２回双葉地区教育構想推進会議において当該見直し方針が承認された。

Ⅱ　新構想のグランドデザイン

（１）　教育構想を改定する理由と重視すべき観点

○ 教育構想の開始から 10 年以上もの年月が経ち、本構想の核であった富岡高校が 2016 年度（平成 28 年度）末をもって休校となるなど構想をめぐる状況が大きく変化する中で、これまでの成果や課題を総括して、新構想として再構築する必要がある。そこで以下の３つの観点を重視して改定にあたっていくことにする。

○ 第１に、教育構想の「真の国際人として社会をリードする人材の育成」という基本目標は受け継ぎつつも、第１フェーズ「草創期」で積み残されていた課題の克服、第２フェーズ「挑戦期」での震災を起因とする様々な状況変化等を踏まえ、当該目標の実現に向けて、取組を実質化・深化させるような新構想に生まれ変わらなければならないこと。

○ 第２に、「震災があったから、見直さざるを得ない」ではなく、震災があったからこそ得られた視点や教訓という観点を大事にすること。震災からの６年間（第２フェーズ「挑戦期」）は怒涛の時の流れであり、苦難に立ち向かう月日であったが、震災後に生まれた新たな芽も大きく育てながら、その推進の核となる枠組みを築くこと。また構想開始後に策定された第６次県総合教育計画や県総合計画、復興計画などの福島県の基本方針を踏まえたものとすること。

○ 第３に、2017 年度（平成 29 年度）には３学年全てが揃うことになるふたば未来学園高校は、震災復興のシンボルとして、富岡高校に限らない双葉郡の５つの高校の伝統・特色を受け継ぐとともに、先進的な教育プログラムを目指していることから、本構想との関係性をしっかりと整理するほか、震災後に双葉郡８町村が中心となって推進してきた「福島県双葉郡教育復興ビジョン」の取組との整合を図り、新構想との相乗効果が生まれるようにしなければならないこと。

（２）　新構想の骨組み

○ 上述の教育構想を改定する理由と、構想の改定に当たって重視すべき観点を踏まえて、新構想の骨組みを以下のとおりとする。

① 新構想の基本目標と教育理念

◇ 構想の基本目標であった「真の国際人として社会をリードする人材の育成」を、新構想においても基本目標として継承する。

◇ この目標を踏まえて、教育理念を設定する。これまでの構想で打ち出していた「開拓者」を育成するという精神を、さらに深化・実質化する必要がある。不毛の土地から農地を開発していった者を「開拓者」というならば、震災後の現在はより不透

明さと、これまでにない創造的な発想が求められている。現在の福島では、新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、変革を起こしていくことが求められているため、新構想における教育理念は「変革者の育成」とする。これは、ふたば未来学園高校の教育目標と一致するものでもある。

② 新構想の名称について

◇ 震災後、本県を取り巻く社会状況が大きく変化し、地域の将来像が明確になっていない中、本構想で育成を目指す「リーダー＝変革者」は、新たな道をつくりあげていく創造性が求められる。

◇ そこで、これまでの教育構想の成果や課題の総括の上に、新構想を打ち立てていく以上、「構想」というフレーズは残しながら、「双葉地区教育構想」という名称を改め、「双葉地区 未来創造型リーダー育成構想」とし、通称を「新構想」とする。

③ 新構想の位置付けと期間

◇ ５年程度を見通したグランドデザイン（思想と方向性・総論）とアクションプラン（具体的な取組・各論）からなる構想とする。新構想は、大きな方向性を示し全体の取組の関係性を有機的なものとするものである。最も重要なのは、関係者が目的、目標を共有し、それぞれが自立して、多様なアクターが協働し、そして創造的な取組を行っていくことであり、新構想はそれが実効的なものになるための海図である。

④ 推進体制

◇ これまでは富岡町・広野町・楢葉町の３町と福島県及びスポーツ団体、大学等の連携により推進してきた。新構想においては、ふたば未来学園高校を中心として、双葉郡内の全ての中学校と連携を図りながら推進することとし、推進体制の枠組みも３町から双葉郡８町村に拡大する。また、「双葉地区教育構想推進会議」の部会は４部構成（総務部会、教育部会、スポーツ部会、JFA アカデミー福島部会）とし、機動的、実効的な組織体制により推進していく。

（３） 新構想で重視する３つの視点

○ 第１及び第２フェーズの総括を踏まえて、新構想では以下の３つの視点を重視するとともに、各論（アクションプラン）の３つの柱立てと対応させることにする。

① 震災を経た課題多き双葉の地だからこそ、未来を創造する人材を育成する

◇ 大震災と原発事故という人類が経験したことのないような災害に見舞われ、多くの子どもたちが避難生活を余儀なくされた。避難先を転々とし、慣れない土地や学校で未だに厳しい環境にある児童生徒もおり、心のケアも依然として課題である。一方で、ふるさとを取り戻そうという前向きな気持ちや、感謝の気持ち、志を持っ

た子どもたちがたくさんいるという強みもある。

◇ 少子高齢化、過疎化、産業空洞化などが全国的に深刻になる中で、震災と原発事故はこれらの課題を先鋭化させており、双葉郡はいわば「課題先進地域」といえる。多くのものは失われたが、他の地域ではできないような、未来を先取りするような新たな挑戦もまた可能となっている。こうした観点を新構想にも反映していく必要がある。

◇ 被災経験を通し子どもたちが獲得した、地域の復興やより良い世界の実現に貢献したいという強い気持ちを、具体的な学びにつなげていくことが必要である。福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想や再生可能エネルギー、廃炉技術の研究開発など、双葉ならではの強みを生かした、実社会の課題解決に挑戦し、世界に発信する実践を通した学びで未来を創造する人材を育成していく視点を重視する。

② 競技力だけではなく、タフでしなやかな、新時代のリーダーを育成する

◇ 第１及び第２フェーズの総括を踏まえ、スポーツでトップの戦績を残すことは勿論のこと、新時代のリーダーを育成することこそが新構想の基本目標であることを再度確認しなければならない。アスリートの先にある、変革者の育成がミッションであり、スポーツを通して地域の復興や活性化に貢献していくレジリエンス（しなやかさ）を持つ、世界に通用する真のリーダーとなるような人材を育てていく。

◇ 本構想のきっかけをつくったＪＦＡは、JFA アカデミー福島において、あえて日本では反発もあるであろう「エリート」の育成という言葉を使ってきた。ヨーロッパなどでは珍しくない寮制の中高一貫教育で、世界に通用する真のアスリートを養成するという目的と精神は色あせておらず、ＪＦＡとの絆を深めながら今後も貫き通す必要がある。

◇ 2020 年（平成 32 年）に開催される東京オリンピック・パラリンピックでは、「東日本大震災被災地の現在の状況を世界に発信し、復興による平和の力を未来へと継承すること」を主要目標のひとつにしている。この大会を通じて前に進む福島の魅力を全世界に伝え、共感の輪を広げながら、福島の誇りを未来につなげるため、福島県は「２０２０年東京オリンピック・パラリンピック競技大会復興推進ふくしまアクションプラン」を策定している。新構想とこのアクションプランを連携させて、オリンピック・パラリンピックで活躍が期待される本県選手の競技力の向上や、オリンピック・パラリンピック教育を推進していくこととする。

③ ふたば未来学園を新構想の核としながら、多様な主体の協働を推進する

◇ 第１フェーズ「草創期」から連携してきたＪＦＡ、県サッカー協会、ＬＰＧＡ、ＪＩＣＡ、福島大学、東日本国際大学、第２フェーズ「挑戦期」から連携してきた福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会、静岡県、猪苗代町など、本構想はこの

ように多様なアクター間の協働により推進されてきている。

◇ ふたば未来学園高校及び併設中学校（以下「ふたば未来学園」という。）の設立もまた、双葉郡の教育長会や文部科学省、ふたばの教育復興応援団など多様なアクターの協力によるものであり、新時代の協働の学校といえる。ふたば未来学園を双葉郡のコミュニティの核としても位置付け、多様な主体と連携して教育の充実を図っていくことが重要である。

◇ 第３フェーズ「飛躍期」においては、これまでの連携・協働を一層強めながら、新たなアクターとの連携・協働も積極的に進めていく。前述のとおり、これまで県＋３町（富岡町、広野町、楢葉町）であった枠組みを、新構想では県＋双葉郡８町村全体に拡大し、より連携を広く深く図っていく。

（４） 「福島県双葉郡教育復興ビジョン」との関係

○ 総論部分の最後に、ビジョンと新構想の関係性について整理しておく必要がある。震災後の双葉郡の教育については、ビジョンを抜きには語ることができない。

○ 富岡町、楢葉町、広野町を含む双葉８町村は、震災後「双葉郡教育復興に関する協議会」を立ち上げ、その具体的な方策について検討を進め、本ビジョンを取りまとめた。前述のとおり、これは中高一貫校設立の牽引力になっただけでなく、震災後の教育復興に大きな役割を果たした。ビジョンでは５つの方針[1]（下記参照）に基づき教育復興を実行していくとしており、この考え方は本構想の思想と軌を一にするものである。

○ その後、協議会はビジョンの実現を図る組織として「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」となり、下部組織としてカリキュラム検討・教員研修委員会やふるさと創造学サミット実行委員会など複数の委員会を設け活発に活動している。

○ こうした現状を踏まえて、ビジョンと新構想の関係性について、概念の整理を試みる。ビジョンは震災後の教育復興を目的として、８町村の視点を中心に、小中学校の取組をメインに描くものである。一方で、新たな構想は従前の構想を総括した上で、県の視点を中心に、ふたば未来学園高校の取組をメインにして中高連携を織り交ぜながら描くものである。

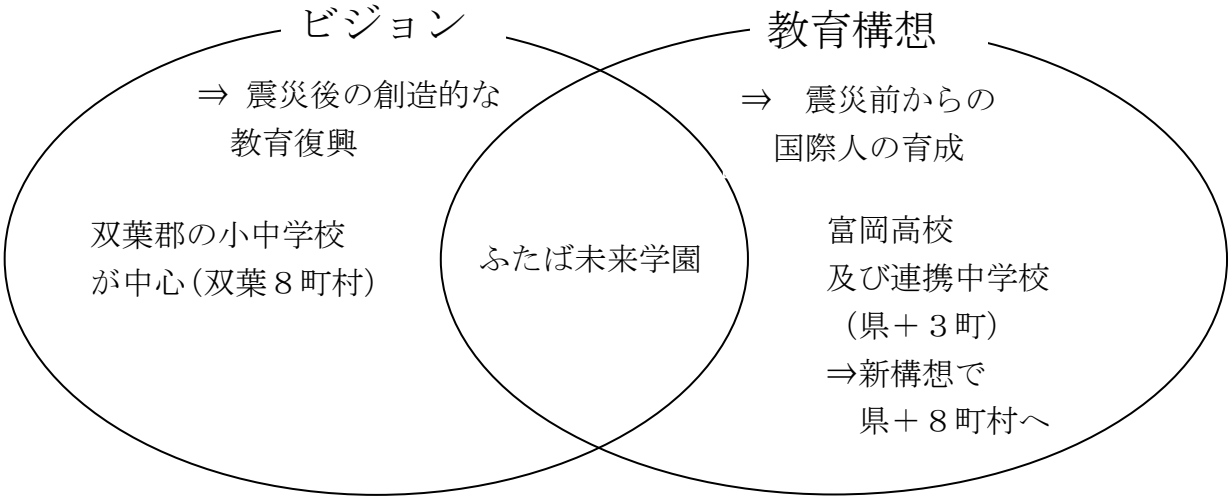
○ しかしながら、ビジョンにおいても中高連携や中高一貫校の提言も含まれており、本構想においても双葉郡の小中学校の「ふるさと創造学」などの取組にも触れているので、関係性を示した以下のイメージ図のとおり、ふたば未来学園を中心に重複している部

1 ①震災・原発事故からの教訓を生かした、双葉郡ならではの魅力的な教育を推進する。 ②双葉郡の復興や、持続可能な地域づくりに貢献できる「強さ」を持った人材を育成する。 ③全国に避難している子どもたちも双葉郡の子であるという考えのもと、教育を中心として双葉郡の絆を強化する。 ④子どもたちの実践的な学びが地域の活性化にもつながる、教育と地域復興の相乗効果を 生み出す。⑤双葉郡から新しい教育を創り出し、県内・全国へ波及させる。

分も多い。それぞれの目指すところは、互いに矛盾することなく相乗効果を期待できる関係性の中にあるといえる。

○ 新構想とビジョンで相乗効果を生み出していくという観点から、学校段階を横断して双葉郡内の教育復興を牽引している「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会事務局」との連携を強化していく。

【図】ビジョンと教育構想の関係性（イメージ）



Ⅲ　新構想のアクションプラン

１．ふたば発、世界に向けた変革者の育成

（１）　変革者育成のための「探究」

○ ふたば未来学園高校では、震災及び原発事故を踏まえ、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、新しい生き方、新しい社会の建設を目指し変革を起こしていく「変革者たれ」を建学の精神としている。この変革者の育成という目標に向けて、必要な資質・能力とは何かについて、既存の言葉ではなく、双葉の子供たちの姿を想定して徹底議論し、ふたば未来学園高校オリジナルの「ルーブリック」[2]（下記参照）を作成している。

○ このルーブリックは、福島県双葉郡教育復興ビジョン（以下「ビジョン」という。）やOECD キーコンピテンシー[3]（下記参照）等も踏まえたものであるとともに、指導の重点や授業の展開、学習評価、学校評価なども、ルーブリックと関連付けながら展開することとしている。

○ ルーブリックで定義された資質・能力は、各教科の学習のみで培われる知識・技能には止まらない、様々な状況で活用できる汎用的な能力である。この能力の育成のためには、実社会における横断的・総合的な問題解決に主体的に取り組み、様々な挑戦や失敗の経験も積まなければならない。そこで、軸となるカリキュラムとして、「探究の時間」を３年間の教育課程に位置付けた。

＜探究① ふるさと創造学＞

○ 中学校の総合的な学習の時間及び高校１学年の産業社会と人間の授業において「ふるさと創造学」の単元に取り組む。「ふるさと創造学」とは、ふるさとに関わる探究的な学びを通じ、子どもたちの生きる力を育む、双葉郡の学校・地域総がかりの取組である。教育と地域活性化の相乗効果を生み出そうと、2004 年度（平成 26 年度）から双葉郡の小中高校で行われている。

○ 例えば、ふたば未来学園高校においては、「ふたばの教育復興応援団」のメンバーでもある劇作家の平田オリザ氏の指導で演劇教育を進めている。グループワークとして町役場、商店、東京電力等を訪ね、復興に向けて地域が抱えている課題を調査し、その課

---

2 「ルーブリック」とは、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表である。

3 「OECD キー・コンピテンシー」とは、OECD が 1999 年～2002 にかけて行った「能力の定義と選択」(DeSeCo)プロジェクトの成果で、多数の加盟国が参加して国際的合意を得た新たな能力概念であり、相互作用的に道具を用いる力、異質な集団で交流する力、自律的に活動する力の３つのカテゴリーにまとめられた。

題を演劇の台本にまとめ、地域住民や取材した関係者を招いて演劇を披露するほか、県内外で公演するなど活発に活動している。

○ このように、小中学校を含めた双葉郡全体で「ふるさと創造学」に取り組み、児童生徒の交流や地域課題への取組の成果の共有、教職員による事例研究・発表等を通じて小中高教育の連携が推進されてきた。双葉郡では未だ県内の避難先での学校運営を余儀なくされている小中学校も多いが、距離を超えて「ふるさと創造サミット」や「中高交流会」などを通じて、絆を結んできた。この全国でも類を見ない先駆的な取組について、成果をモデル化して県内外に発信・波及させる。

＜探究② 未来創造探究＞

○ 高校２～３学年の総合的な学習の時間等では「未来創造探究」に取り組む。「未来創造探究」とは、グローバルな視点から地域課題の解決及び地域再生の実践を行い、国内外での研究成果発表や提言を目指した課題探究の取組である。生徒全員が、原子力防災、メディア・コミュニケーション、再生可能エネルギー、アグリ・ビジネス、スポーツと健康、福祉と健康の６つの探究班のいずれかに所属し、「ふるさと創造学」や各学習によって気づき、発見した、地域が直面している課題を踏まえ、ゼミ形式で探究する。

再生可能エネルギー探究班「藻で発電」に向けた実験

○ ビジョンに基づき小中学校を含めた双葉郡全体で取り組む「ふるさと創造学」に対し、ふたば未来学園高校において全県的、全国的な視野で発展的に位置付けたのが「未来創造探究」である。「ふるさと創造学」と「未来創造探究」は連続性のある取組であり、ふたばならではの教育としてしっかり取り組んでいく。そのため、地域での実践的な研修や国内先進地域での研修を継続的に実施できるよう必要な支援を行う。

○ 探究と各教科のつながりを深めながら、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、アクティブ・ラーニングによる、より深い学習となるよう努めていく。探究においては、ルーブリックで定義した様々な汎用的能力を育成する。一方、教科学習においては、個別の知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力を育成する。探究は各教科の学びの下支えとなり、各教科で培われた知識・技能を活かして探究が展開する。カリキュラム・マネジメントの視点で探究と教科学習を構造化していく。

○ 学校全体の意識を統一するルーブリックの設定と、カリキュラム・マネジメントを土

台とした、アクティブ・ラーニングの展開を重視する取組は、文部科学省により、学習指導要領改訂や高大接続改革を先取りする好例として全国の学校に紹介されているが、県内においても各種研修の機会を設定して普及、水平展開を図り、ふたばから県、全国への２１世紀型教育の発信を目指す。

（２）双葉発グローバル人材の育成

○ 原子力災害からの復興を果たす人材を育成するため、アクティブ・ラーニングを効果的に導入し、グローバル人材に求められる思考力、判断力、発信力及びチーム力の育成を図るふたば未来学園高校における実践が、文部科学省から「スーパーグローバルハイスクール」（ＳＧＨ）として指定を受けており、さらに取組を推進していく。

○ ふたば未来学園高校におけるＳＧＨでは、１学年次には、多様な価値観について学習する「ふるさと創造学」で地域の課題を把握し、海外研修や「ＪＩＣＡグローバル・キャンプ」を通して、地域社会が抱える問題をグローバルな視点から解決する方法を学ぶとともに、２学年次には、地域課題の解決に向けた提言を目指し、「未来創造探究」の発展的な学習を行うものであり、高校におけるカリキュラム全体で展開する。

○ ＳＧＨの取組として、県及び企業や関係団体、大学、国際機関と連携し、グローバルな課題である「原子力災害からの復興」をテーマの中心に据え、その原因、背景、過程について探究しつつ、地域再生の実践を行うとともに、探究活動の成果を基に、国の省庁や自治体等への提言や、国内外での研究成果の発表を行うことを目指していく。

○ ふたば未来学園高校では、１学年を対象としてドイツ、２学年を対象としてアメリカへの研修を実施している。ドイツ研修では、再生エネルギー政策を積極的に推進している都市を訪問し、当該政策の利点や問題点を探り、国内における将来のエネルギー政策の在り方を研究するとともに、環境問題を軸に地域の課題に取り組んでいる現地の連携校と交流を図ることとしている。また、アメリカ研修では、ニューヨークを訪問し、国際連合関係者へのプレゼンテーションや、同世代との交流を行い、世界に福島を発信する取組を行っている。これらの海外派遣は、原子力災害からの復興や持続可能な社会づくりをテーマとする未来創造探究の基軸となる取組であり、毎年度確実に実施できるよう必要な支援を行う。

ドイツ連携校でのプレゼンテーションの様子

○ 双葉郡の各町村においても、中学生を海外に派遣する事業を行っている。双葉町では双葉町海外派遣事業としてニュージーランドに、大熊町では「おおくま希望の翼」としてオーストラリアに、広野町では広野町中学生海外教育交流派遣事業としてカナダに

それぞれ派遣している。また、葛尾村及び川内村では、2016 年度（平成 28 年度）から両村が連携した取組として、アメリカへの派遣を始めた。

○ 各町村が実施しているこのような中学生の海外研修事業のほか、ふたば未来学園高校と双葉郡内の中学校が連携した海外研修やふたば未来学園高校に併設される中学校における海外研修の実施について検討する。また、持続可能な地域づくりを目指している国内先進地域を訪問したり、各地域のリーダーと交流する研修の機会等を設け、ふたばの地からグローバルな視野を有した人材を輩出するとともに、双葉郡の復興を発信していく取組を行う。

○ また、双葉８町村の小中学校を対象に、2016 年度（平成 28 年度）から県の事業として小中連携による英語教育を推進している。複数校をインターネットでつないだ授業、英語力向上を目指した外部施設における異文化体験交流活動を行っているほか、中学校区ごとに、小中学校教員相互の授業参観及び研究協議、有識者による講演会などを行っている。これらの取組との連携、接続を視野に入れながら、ふたば未来学園において独自の英語教育を展開していくため、必要な教員の配置、研修機会の確保等の支援を行う。

○ グローバル人材育成の取組として実施している、ＪＩＣＡから派遣された職員を講師に招いての講演やワークショップを継続して実施していく。

○ ふたば未来学園高校のＡＬＴが広野中学校と楢葉中学校を訪問し、連携授業を実施している。今後は、各町村のＡＬＴの交流や中高交流会におけるＡＬＴの活用等も含め、これらの事業を双葉郡内の各町村の中学校に広げるとともに、グローバル人材育成に向けて中高が連携していくための支援を行う。

○ ふたば未来学園高校のＳＧＨの展開は、富岡高校の国際コミュニケーションコースの発展形と位置付けられる。町村立中学校とふたば未来学園高校及び併設される県立中学校が連携してグローバル人材の育成を推進し、課題先進地域ならではの先進的な取組として展開していく。

（３）スペシャリストの育成

○ ふたば未来学園高校は総合学科であり、当面休校となる双葉郡の各サテライト校の学科内容や特色、伝統を受け継ぎ、普通科目及び専門教育の科目について、幅広く学ぶことができる。上級学校に進学するための発展的な科目を学ぶことができる「アカデミック系列」、スポーツ分野での高度な技能の体得などに対応した「トップアスリート系列」、職業人を目指すために必要な専門科目を学ぶことができる「スペシャリスト系列」の３系列が設定されている。

○ スペシャリスト系列においては、農業科目群では「食品加工」や「草花」、工業科目群

では「地域エネルギー」や「社会基盤工学」、商業科目群では、「商品開発」、福祉科目群では「介護総合演習」などの実践的な学習を行い、専門的な基礎知識や技術の習得を通して、地域を支える職業人を目指す。

○ 農業分野では、車両系建設機械運転者、日本農業技術検定、測量士補など、工業分野では危険物取扱者、ボイラー技士、国家技能検定など、商業分野では、簿記、情報処理、ワープロ、販売士、パソコン利用技術、秘書技能、電卓など、福祉分野では、介護職員初任者研修などの資格取得を目指す。

○ キャリア教育の取組として、双葉郡の各町村においては、中学生の各学年において職業体験などを行っている。これらの教育の成果を共有しながら、キャリア意識の形成に向けた中高の取組を連携していく。

○ ふたば未来学園高校のスペシャリスト系列は、富岡高校の福祉・健康コースの発展形と位置付けられる。町村立中学校とふたば未来学園高校及び併設される県立中学校が連携して取り組み、課題先進地域ならではのキャリア教育とスペシャリスト育成の先進的な取組として展開していく。

○ ふたば未来学園高校では、福祉健康人材育成プランの取組として、福祉及びスポーツと健康に関する高い専門性を身に付けるために、大学訪問、大学の教員や専門職員等による特別講義を実施している。今後も引き続き福祉・介護の担い手として社会貢献できる人材及び総合的な健康づくりや、スポーツ活動をコーディネートできる人材の育成を目指す。

○ 震災、原発事故によって失われた浜通りの産業・雇用の回復を目指すイノベーション・コースト構想を推進する上で、構想を担う人材の育成は最重要課題の一つである。そこで、ふたば未来学園において、勤労観、職業観の醸成に努めるとともに、イノベーション・コースト構想を支え、やがて復興を担う産業・研究・教育の中核となって活躍するという意欲の喚起を促す。

（4）中高一貫教育に向けて

○ 変革者の育成のため、中学校から６年間を通して、「未来創造学」、新しい時代を担う市民を育成する「シティズンシップ教育」、充実した英語教育と世界を体験する「海外研修」など魅力ある取組を行う。１学年 60 名程度を双葉郡や県内外から募集し、６年間を通した先進的な教育を行い、グローバルな視点で地域や世界で活躍するリーダーとアスリートの育成を目指す。

○ 幅広い年齢層による学校生活を通して豊かな人間性や社会性を育み、道徳教育などの充実により豊かな心を育成し、双葉郡各町村の教育計画や復興計画などとも関連させながら、教育課程や教育環境の整備を推進し、地域に貢献する人材育成を目指す。高い

志や目的意識を持った生徒を、双葉郡をはじめ県内外から募集・選抜し、中高一貫の学びの基礎づくりを進める。

○ ふたば未来学園高校に併設する中学校は 2019 年（平成 31 年）４月開校を目標としており、校本設校舎や関連施設の整備もこれに合わせて鋭意進めている。また、「ふたば未来学園中高一貫教育検討協議会」において、2016 年度（平成 28 年度）から「併設中学校の教育方針」に基づいた教育内容等に関する協議を進めており、2017 年度（平成 29 年度）に協議結果をまとめることとしている。新構想に基づく取組やビクトリープログラムによる入学者選抜なども、本協議会において調整を図りつつ適切に位置付けていく。

（５）変革者育成のための指導体制・教育環境の整備

○ ふたば未来学園及び連携する双葉郡の町村立中学校に探究的な学習を指導できる教員を配置すると共に、地域や社会の変革に取り組んでいる第一線の講師を招聘する。

○ 双葉ならではの強みを生かした、実社会の課題解決に挑戦し、世界に発信する学びを実現するために、充実した指導体制を整備するとともに、探究学習やアクティブ・ラーニングなどに係る教員研修の機会を確保し、グローバルな課題に立ち向かう未来創造型リーダーの育成につなげていく。

（新校舎での教育環境）

○ 広野町の西側に位置する町総合グラウンドに隣接した場所に、2018 年度（平成 30 年度）末までの完成を目途としてふたば未来学園の新校舎並びに運動施設等の附属施設の整備を進めている。新校舎は、馬蹄形に配置した８つの建物をホールや渡り廊下等でつなぎ、広野町の街並みを優しく受け止めるイメージのデザインとしている。校内には多目的スペースやカフェなどを設け、地域の人達が気軽に立ち寄れる憩いの場とする。なお、休校となった双葉郡の５つの高校の校旗等を保管することとし、学校が再開するまでの間、各校の歴史・伝統をつなぎ、守る役目も果たす。

○ 学習スペースや農業、商業実習室などの特別教室も十分なスペースを確保し、総合学科のカリキュラムに対応した施設配置とするとともに、普通教室に隣接する「アクティブラーニングスペース」や、階段の前のスペースについて多様な使い方を可能とする「階段教室」など、生徒の学びに柔軟に対応できる場所を設け、生徒の主体性を伸ばす教育環境を確保する。

○ トップアスリート育成のため、国際規格を満たすバドミントンコート 10 面がとれるアリーナ棟や野球グラウンドとともに、校舎敷地の近接地に人工芝のサッカーグラウンドを整備するなど、体育施設も充実させる。

＜ふたば未来学園 新校舎等概要＞

● 校舎概要（敷地面積：約 57,000 ㎡）
- 普通教室棟；木造２階
  【中学・高校普通教室棟、階段教室、アクティブラーニングスペースなど】
- 管理特別教室棟；RC 造３階
  【校長室、事務室、多目的ホール、多目的スペース、食堂、図書室、選択教室、特別教室など】
- 体育施設棟；鉄骨造３階
  【アリーナ１、アリーナ２、格技場】
- その他附属施設（温室、プールなど）
- グラウンド（1 周 200m トラック）
- 野球場（センター124m、両翼 94m）

● 寄宿舎概要（敷地面積：約 5,500 ㎡）
- 鉄骨造３階　定員 180 名

● サッカーグラウンド概要（敷地面積：約 2,600 ㎡）
- サッカーコート（人工芝）１面 105m×68m）

ふたば未来学園イメージ（鳥瞰図）

ふたば未来学園イメージ（校舎）

ふたば未来学園イメージ（中庭）

ふたば未来学園イメージ（正門）

（寮の運営と寮における人間教育）

○ 2015 年（平成 27 年） 4 月のふたば未来学園高校の開校に伴い、避難している生徒を含め、県内外から高い志と目的意識を持って、保護者の元を離れて生活する生徒を受け入れるため、仮設の設備により広野町に高校の寄宿舎「立志寮（りっしりょう）」を開設した。安全・安心に良好な生活環境を保ちながら規律ある共同生活が送れるよう寄宿舎指導員と寄宿舎監督員を配置し、生徒の指導に当たっている。寮は人間教育の場でもあることから、共同生活を通じて規則と責任を重んじ、親和・協調の精神を身につけるように心がけるとともに、自分自身の行動に自覚と責任を持ち、社会に役立つ人間となるための資質が養えるよう促していく。

○バドミントンのビクトリー生が生活する猪苗代町の緊急寮については、猪苗代町を活動拠点とする 2018 年度（平成 30 年度）末までの設置とし、それまでは十分な寮スタッフを配置して安全で安心できる環境を維持しつつ、規律ある共同生活を継続する。

２．新時代のトップアスリートの育成

○ アスリートとしての競技力のみならず、スポーツを通して地域の復興や活性化に貢献していく変革者の育成を目指して、練習環境の整備や指導体制の充実を図るとともに、競技（種目）を横断した人材育成プログラムを実践していく。

○ 2017 年度（平成 29 年度）以降は、ふたば未来学園高校を核として構想を推進することになることから、同校トップアスリート系列の競技種目（サッカー（JFA アカデミー福島、県版サッカー）、バドミントン、レスリング及び野球）を全て新構想の対象とし、中学校・高校の教育課程と新構想及び部活動との円滑な接続を行っていくこととする。また、震災後に分散していたトップアスリート育成の拠点を、再び双葉郡に集約させていくこととする。

○ 各競技とも指導力のある教員やコーチを配置するなど、指導体制の充実に努めるほか、スポーツを通して社会を変革している第一線の講師を招聘し、各競技の競技力向上につなげるとともに、競技を横断したメンタル面や科学的トレーニング等に関する知識を学習する機会を設ける。

○ 双葉郡の地域コミュニティの再構築においては、スポーツが大きな役割を果たすことが期待されている一方、全国的にもスポーツを活用して地域や組織を経営できる人材の不足が大きな課題となっている。そこで、外部有識者や企業・ＮＰＯ等の支援も受けながら、スポーツを通じた地域の復興、創造に取り組む探究的な学習を行っていく。具体的には、スポーツの分野に特化した地域変革の先進事例や、スポーツ・ビジネス・プランニングの方法論を学び、最終的には生徒が自ら地域課題を解決するビジネスプランを立案し、実践できる能力を養成する教育に取り組んでいく。

（１）双葉地区におけるサッカーの新たなチャレンジ

（Ｊヴィレッジの再開）

○ ＪＦＡアカデミー福島の活動拠点であったＪヴィレッジは、震災後、原子力発電所事故の収束拠点として、国及び東京電力株式会社に使用され、本来の機能が損なわれていたが、2016 年度（平成 28 年度）から原状回復工事が開始され、2019 年（平成 31 年）の全面再開を控え、2018 年（平成 30 年）夏には宿泊施設やグラウンドなど一部機能の再開を予定している。

○ 再開後は、日本代表等のトップチームをはじめ、全国から多様なチームの合宿や大会での利用が見込まれ、双葉地域におけるスポーツを通じた交流の拠点として、同地域におけるスポーツ人材の育成に貢献していく。

○ Ｊヴィレッジの再開とともに、サッカー振興を通じた地域活性化に取り組んでいくため、2017 年度（平成 29 年度）から県とサッカー関係者が連携して「ふくしまサッカーチャレンジプロジェクト」を推進していく。

＜全面再開後のＪヴィレッジの施設（予定）＞

・グラウンド９面（天然芝７面・人工芝２面）
・全天候型練習場（人工芝１面）
・スタジアム（天然芝、5,000 人収容）
・宿泊施設（約 200 室 470 名収容）

（JFA アカデミー福島）

○ JFA アカデミー福島は、「常に（どんなときでも、日本でも海外でも）ポジティブな態度で何事にも臨み、自信に満ち溢れた立ち居振る舞いのできる人間を育成する」という目的のもと、ＪＦＡが設置・運営している。この目的は新構想と軌を一にするものであることから、引き続きＪＦＡとの連携を密にし、広くスポーツ界や社会全体に発信できる、トータルなリーダーシップを備えた人材の育成を目指していく。

○ JFA アカデミー福島の運営主体であるＪＦＡは、2011 年（平成 23 年）11 月、「JFA アカデミー福島ヴィジョン」を決定した。その中で、「JFA アカデミー福島は福島県との教育構想を継続し、現在のＪヴィレッジの環境が整い次第 JFA アカデミー福島としての活動を福島県で再開する。」という基本方針と、再開の前提条件として次の３つが示されている。

① 放射能の除染も含めライフラインが整い、広野町、楢葉町の町民の方々が安心して日常生活を送ることのできる環境が整う。
② Ｊヴィレッジが再開され、多くの子ども達がサッカーをプレーできる環境が整う。
③ Ｊヴィレッジ内の JFA メディカルセンターが再開できる環境が整う。

○ JFA アカデミー福島の本県での再開については、Ｊヴィレッジが 2018 年(平成 30 年)に一部再開、その翌年には全面再開となる予定であることから、Ｊヴィレッジ再開後の状況等を勘案しながら、再開の時期等について、ＪＦＡを中心に検討が進められている。2017 年（平成 29 年）には具体的な検討を進め、再開に向けた行動計画を策定することとしている。

○ 県では、Ｊヴィレッジの再生やＪＦＡアカデミー福島の本県での再開に向け、機運の醸成を図るため、2017 年度（平成 29 年度）から「ふくしまサッカーチャレンジプロジェクト」を関係団体と連携・協働しながら実施しており、本県サッカーの一層の振興と、双葉地域におけるサッカーを通じた地域活性化を進めている。

○ なお、静岡における教育環境については、ふたば未来学園高校三島長陵校舎への本県教員の配置を継続するほか、本校舎との交流の機会の充実を図るとともに、静岡県教育委員会及び三島長陵高校等と連携しながら、教育環境の一層の向上に努める。

（県版サッカー）

○ 富岡高校では JFA アカデミー福島のほかに、学校の教育課程及び部活動において男女サッカー部の競技力もまた高めてきた。これは、富岡高校サッカー部の強化によって県全体のレベルの底上げを図るとともに、同校が県内中学生トップクラスの選手の受け皿となることにより、優秀な選手の県外流出を抑止することも視野に入れたもので、県サッカー協会の「サッカー王国宣言」と連動したものであった。このサッカー部の強化も、富岡高校の伝統・実績を踏まえ、新たな形でＪＦＡや福島県サッカー協会と連携し、県内クラブチームなどの支援を得ながら、引き続きふたば未来学園高校サッカー部の強化に取り組んでいく。

○ 年間を通じたＪＦＡ派遣コーチによる授業トレーニング及び部活動における指導については、ＪＦＡの協力を得ながら継続する。

○ 従来の、指導者（担当教諭、コーチ等）から生徒への一方的指示・指導により技術の向上や競技力強化を進めるのではなく、選手（生徒）が、自分たちで主体的に考え、自らの判断で主体性を持って行動することを基本とする、いわば「スポーツのアクティブ・ラーニング」といえる手法を取り入れる。外部有識者の助言も得ながら、この手法をメソッドとして磨き上げ、競技力とタフでしなやかなリーダーとしての資質を兼ね備えた、変革者の育成に取り組んでいく。

○ 県内における女子サッカーの底辺拡大、技術レベルの向上も課題であり、高校段階で

の受け皿不足による有望な生徒の県外への流出が続いていることから、女子部の強化にも努めていく。

○ 富岡高校が国際人材育成プランとして取り組んできた、海外でのスポーツ交流研修も引き継ぎ、海外の一線のクラブでのトレーニングを身体で吸収し、競技力の向上につなげると共に、真の国際人として社会をリードする人材の育成を進める。

（２）ビクトリープログラムの今後

○ 中学校・高校６年間の一貫した指導プログラムを「ビクトリープログラム」と称し、バドミントンはインドネシア人指導者、ゴルフはＬＰＧＡ派遣のプロゴルファーという専任のスペシャルコーチによるハイレベルで充実した技術指導、トレーニング指導等を行うとともに、学業やスポーツに専念できる生活環境（寮）を整え、専門的な技能と国際感覚を身に付けたトップアスリートの育成を行ってきた。こうした充実した体制を今後も継続していく。

○ 公立の中学校、高校において、このような充実した指導体制や練習環境を整え、全国公募によりトップアスリートの育成・輩出を目指すという人材育成プログラムは、全国的にみても例のない先駆的、画期的な取組であるといえる。ビクトリープログラムの目的は、単に高度なスポーツ技術を有するアスリートの育成ではなく、国際感覚やコミュニケーション能力、優れた人間性も身に付けたスポーツ人材であり、高度にバランスのとれた人間の育成である。未来創造型リーダーの育成と、トップアスリートの先にある、変革者の育成がミッションであることを確認し、スポーツを通して地域の復興や活性化に貢献していくレジリエンス（しなやかさ）を持つ、国際舞台で活躍する真のアスリートを育てていくことを目標にしていく。

○ 本県から世界で活躍するトップ選手が誕生し、飛躍していくことが、復興に向け懸命に前に進んでいる地域や県民の活力となり、また大きな喜びや勇気も与えてくれるとともに、対象競技の本県での競技者・ファンの増加や、県内の技術レベルの底上げにつながる。さらに、卒業して国内外へ羽ばたいていった卒業生は、双葉地区を第二の古里として愛着を持ち、将来に亘り「ふたばファン」として地域を応援してくれる。今後は、このような効果がより高まるようビクトリープログラムの充実を図るとともに、ビクトリー生の活躍の広報に努め、県民がその成果を共有できるよう進めていく。

（バドミントン）

○ バドミントン競技においては、中学校、高校とも全国有数の強豪校に成長し、卒業生も日本代表に選出されるなど、本県スポーツの「宝」となった。今後も、練習環境の整備や指導体制の強化等により、今まで積み上げてきた実績とサポート体制の更なる充実に努めていく。

○ 猪苗代町において活動しているバドミントンについては、2017 年度（平成 29 年度）～2018 年度（平成 30 年度）は、引き続き拠点を猪苗代町とする。これまで同様富岡町がビクトリープログラム参加希望者の募集を行い、合格した生徒は富岡第一中学校に入学し、猪苗代中学校に区域外就学する。高校段階ではふたば未来学園高校に入学し、猪苗代校舎に通学する。

○ ふたば未来学園の本設校舎等の完成及び併設中学校の開校に合わせて、活動拠点を広野町に移動させることとする。2019 年度（平成 31 年度）以降の中学生は併設中学校に入学することとし、これまで「ビクトリープログラム審査実行委員会」が行ってきたビクトリー生の募集及び対象の選定は、併設中学校の入学者選抜として県が中心となって実施する。

○ 2018 年度（平成 30 年度）に中学１、２年生である生徒は、進級時に併設中学校へ転学することとする。なお、転学にあたっては、事前に生徒、保護者に対して説明を尽くし、理解を得た上で進めるよう十分配慮する。

○ 関係団体の協力を得ながら、バドミントン競技の愛好者が、ビクトリー生が有する技術に間近で触れる機会や、スポーツ少年団や学校部活動に所属する子どもたちに技術を伝達する機会を設け、ビクトリープログラムの成果を県内に還元する。

（ゴルフの休止）

○ 震災前は、富岡町とＬＰＧＡとの連携のもと、富岡高校から至近距離に位置した「リベラルヒルズゴルフクラブ」を拠点に、中高一貫教育によるゴルフのトップアスリートを育成してきた。震災後は福島市を拠点として活動してきたが、練習環境が必ずしも十分ではないことから、中学からの募集は行わず、高校段階のみの育成としていた。富岡高校休校まではこの体制を維持していたが、2017 年度（平成 29 年度）以降は、ふたば未来学園高校本校における練習環境等を勘案し、当面休止することとする。

（３）新たな競技種目

（レスリング）

○ レスリングについては、ふたば未来学園高校のトップアスリート系列の種目として位置付けられているが、いわき市内の企業が小・中学生を対象としたキッズレスリングクラブを運営し、選手の育成を行っていることから、当該クラブとの連携を視野に入れつつ強化を図っていく。なお、ジュニア期からの育成・強化を行えば全国大会等での上位入賞の可能性は高いといえ、新構想が目指す国際社会で活躍するトップアスリート育成の競技として相応しいことから、レスリングについても 2019 年度（平成 31 年度）以降にビクトリープログラムの対象に加えることを検討する。

（硬式野球）

○ 同じくふたば未来学園高校のトップアスリート系列の種目である硬式野球については、甲子園出場経験を持つ双葉高校の伝統を継承しつつ、甲子園出場を目標に競技力の向上を目指す。

○ 東日本国際大学をはじめとした県内大学野球部との連携方策について検討する。なお、連携に当たっては、県高等学校野球連盟の許可の要否を事前に確認するなど、必要な手続きを経たうえで進める。

３．多様な主体との連携・絆づくり

○ 双葉地区教育構想の特徴は、学校や教育委員会だけではなく、様々な主体が強い想いを持ちながら、連携し新しい教育を形作っていったことにある。新構想においても、第１及び第２フェーズの参加者を巻き込みながら、連携・絆の輪を広げていくこととする。

○ 前述のとおり、これまでの富岡町等の３町から、双葉８町村の推進体制として、連携の輪を広げていく。ふたば未来学園は双葉８町村からの要望を受けて設置された経緯などを踏まえ、８町村でどのようにふたば未来学園を支援していくのかなどについて、双葉郡教育長会等において検討していく。

（１）双葉郡教育復興ビジョン推進協議会

○ 「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」（以下「ビジョン協議会」という。）は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」の推進組織として、国の支援を受け、福島大学内に事務局を置き運営されている。2016 年（平成 28 年）３月には、ビジョン協議会の取組計画全体を定めるものとして「福島県双葉郡教育復興推進計画書」が策定された。ビジョン協議会による取組は、８町村連携による復興を担う人材育成に向けた双葉郡ならではの魅力ある教育の推進の基軸となるものであり、新構想が目指す人材育成と相通じるところがあることから、連携を図りながら新構想に基づく取組を推進していく。

○ ビジョン協議会が実施している「ふるさと創造学サミット」や「中高生交流会」は、ふたば未来学園高校の生徒及び双葉郡の子どもたちが学校種を超えて交流する数少ない機会であり、「ふたばの絆」づくりにつながる取組である。これらの取組により、中学生に対するふたば未来学園高校との中高連携の意識の醸成を進めていく。

中高生交流会　１

中高生交流会　２

（２）ふたばの教育復興応援団

○ 「ふたばの教育復興応援団」は、福島県双葉郡の教育復興を応援しようという各界の有志（著名人）により 2014 年７月に設立された。「前例なき環境には、前例なき教育を」を合い言葉に、ふたば未来学園高校及び双葉郡の学校の教育や行事への参加などにおいて協力を得ている。

○ これまで秋元康氏、小泉進次郎氏、為末大氏、平田オリザ氏、山崎直子氏、宮田亮平氏、佐々木宏氏、箭内道彦氏による特別授業が行われてきた。特に平田オリザ氏による演劇指導は延べ十数回に達しており、演劇部が大会で受賞するなど、大きな成果が現れている。

また、2016 年（平成 28 年）９月にはＪＦＡの田嶋会長がメンバーに加わり、定期的にふたば未来学園高校での授業を受け持つ等の協力を得ている。今後も、専門的能力や知名度を有している各メンバーに、小中学校も含めた双葉郡での教育活動に対して協力を得ていく。

（３）双葉地区地域学校協働本部

○ 震災後に双葉郡の小中学校及び高校全体のコーディネートを担うコアとなる学校支援組織として、2015 年度（平成 27 年度）に「双葉地区学校支援本部」が設置された。同本部では、各町村の学校支援地域本部または地域コーディネーターの活動の支援を進めるとともに、双葉郡全体でのイベント企画やボランティアの調整、ふたば未来学園の支援を行っている（2016 年度（平成 28 年度）からは「地域学校協働本部」と名称改正)。今後は地域コーディネーターの協力を得ながら、学校と地域コミュニティの連携・協働を一層推進していく。

（４）ＪＦＡとの連携

○ ＪＦＡと福島県は、双葉地区教育構想の開始以来、強固なパートナーシップで取組を進めてきた。2017 年(平成 29 年) ３月には、ＪＦＡと日本プロサッカーリーグ（Ｊリーグ）とが共同で「DREAM 福島アクションプラン 2017」として、福島支援の様々なプログラムを打ち出している。指導者派遣やサッカー教室の実施、キッズプログラムの展開、理事会や大会の現地開催などによるサッカー振興を通じて、双葉郡・福島県の復興を支援していくこととしている。

（５）サポートファミリー制度の再開

○ 震災前まで各町で組織されていたサポートファミリーは、遠く古里を離れて双葉郡に来ていた JFA アカデミー福島やバドミントンの生徒の心のよりどころとなり、またファミリーとなった町民も我が子のように愛情を持って受け入れて、子どもたちの活躍

や成長の様子を喜びとして感じていた。それが、富岡高校卒業後、全国各地へ巣立っていった後も、第二の古里として双葉の地への愛着を持ち続ける大きな要因となっていた。

○ 生徒の受入環境が整い次第、サポートファミリー制度の再開を目指すこととする。まずは町民の帰還が進んでいる広野町での再開を進め、他町村においても住民帰還の状況等を考慮しながら再開又は新たな導入の検討を進める。

（６）ＪＩＣＡとの連携

○ 推進会議の構成団体でもある JICA 二本松は、これまで国際協力に関する出前講座を実施したり、高校生向けのグローバルセミナーを開催したりするなど、構想の目指す国際人の育成に多大なる貢献をしてきた。

○ 今後はふたば未来学園高校のスーパーグローバルハイスクール事業の一環として、JICA グローバル・キャンプなどの取組を推進し、引き続き JICA 二本松と連携して国際人の育成を推進していく。

（７）大学との連携

○ 福島大学、東日本国際大学をはじめとした県内外の大学との連携を強化する。カリキュラム作成や教員研修、学習支援やボランティア学生の派遣など、大学の専門性や人材を生かした関わりを推進する。

○ 富岡高校においては、これまで福島大学教授による「運動と身体」などの授業を通じて競技力の強化を図ってきた。引き続き、ふたば未来学園高校において、福島大学等の協力を得ながら、スポーツの技能や心理学等の専門的な講義を実施していく。

○ 富岡高校では、東日本国際大学の協力により、「社会福祉入門」、「高齢者福祉入門」といった専門性の高い授業を行うなど、高大が接続した教育カリキュラムにより介護福祉士等のスペシャリストの養成を進めてきた。今後、ふたば未来学園高校においても介護職員初任者研修を実施することとされており、資格取得を重視した高大連携による人材育成に取り組んでいく。

（８）ＮＰＯとの連携

○ ＮＰＯと連携し、大学生等の協力を得て、放課後学習支援、探究学習支援、キャリア教育の充実を図る。

○ 具体的には NPO 法人カタリバと連携し、ふたば未来学園において、探究学習の授業サポートや放課後の居場所運営、大学や企業との連携のコーディネートを推進すること

とし、「ふたばコラボ・スクール」として学習拠点を整備する。

（９）姉妹校等との国際交流

○ これまで、富岡高校ではフランスのルイ・バスカン高校との姉妹校締結により学校間の交流を行ってきた。しかしながら、震災後、両校の交流は低迷した状態になった。震災の影響のみならず、ルイ・バスカン高校の学校種が変わり、高校生同士の交流が難しくなったという事情も抱えていた。

○ 他方、ふたば未来学園高校は文部科学省のＳＧＨの指定を受け、ドイツやタイ、ベラルーシなど多様な国々に生徒を派遣し、国際社会の「変革者」の養成を行っている。このような状況を踏まえ、富岡高校の休校をもって、ルイ・バスカン高校との協定に基づく取組は休止することとし、その後はふたば未来学園で取り組まれているグローバルリーダー育成の取組をさらに飛躍させる方向で推進する。